

# おじさんの青春日記

その8

我もまた異人となりし涼しさよ



# おじさんの青春日記 その⑧

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、全国の  
孤独なおじさんに捧げる

著者 里吉賢司

表紙・イラスト 栗原俊幸

「おじさんの青春日記」シリーズはホームページでもご覧いただけます。  
<http://www.urban.ne.jp/home/ojisan/>

舞  
姬

## 舞 姫

窓の外には花びらが散り終えた桜の巨木に小さな若葉が芽吹いて、幼い緑の先に遠く皇居の白壁がかすんで見えていた。

二〇〇三年（平成一五年）四月一九日。東京・丸の内、東京會館。夕刻から朝日新聞社主催による「第六回 朝日俳句新人賞授賞式」と祝賀のパーティーが催された。煌々と輝く照明に照らされ、時折フラッシュを浴びながら壇上に並ぶ三人の受賞者のなかに、興奮を押し殺し、まっすぐに正面を見据える佳川清資（よしかわ きよし・仮名）氏の姿があった。

俳句愛好家のための雑誌「俳句朝日」は一九九五年創刊。翌年から月刊誌となり、創刊八年目の二〇〇三年九月号をもって一〇〇号を迎えた。読者は約二万人。

五十歳までの新人たちによる一年間の膨大な数の句作から抽出された応募作のなかから毎年初夏、「朝日俳句新人賞」、「同奨励賞」が選ばれ賞が授与される。俳壇でのデビューをめざす人たちにとって、古い伝統と格式を誇る「角川俳句賞」と並び称される新人の登竜門である。

選考は四人の選者の熟論を経て行なわれ、今回の選考過程の一部始終は受賞者が発表された「俳句朝日・五月号」誌上のなかで、実に十三ページにわたって掲載されている。

新人賞は句集『夏炉』の高橋とも子氏。佳川清資氏は句集「養虫」の西田れい子氏とともに新人賞奨励賞を受賞した。

受賞対象となった佳川氏の作品集「ほのぼのと」五十句のなかから一句。

踊らない人を離れて踊りけり

佳川清資

「見ている人からする人になる 作者が受動の生き方から一歩踏み出そうとしている心情を、盆踊りにたとえて表現している」。のちにある識者はこの句をこう評している。

受賞式のあと、壇上のマイクの前に立った佳川清資さんは緊張で上ずった声で謝辞を述べた。

「……………私はこれまで伝統俳句を詠んでまいりました。つまり、写生と花鳥諷詠を重んずる、堅い、まじめな俳句です。生活環境の変化や仕事の忙しさも手伝って、長い間俳句の世界から遠ざかっていましたが、ある時、結社「白桃」の伊藤通明先生から突然お便りをいただきました。

『君の俳句、かねてから注目しています。写生もいいですが、もっと心を込めて、そして誰にも詠めない大胆な俳句をつくってはいかが』

とご激励いただきました。

見ず知らずの私を虚心に激励してくださる大先輩からの言葉に励まされて、もっと自由に作句してみようと考えるようになりました。同時に、自分自身の生き方もそうありたい、とも考えるようになりました。それからの作品は、いびつで、強引で、荒々しい俳句ではありましたが、自分の体の血流が変わり始めたような、そしてしつかりとした手ごたえを感じるものになりました……」。

来賓として出席した元東京大学総長であり元文部大臣、物理学者、俳人という華麗な経歴をもつ有馬朗人氏がパーティーの祝辞のなかで、佳川氏の作品のいくつかを挙げて詠唱しつつ賛辞を述べたことは、佳川さんにとって終生忘れない出来事となった。

俳句人口は百万人とも一千万人ともいわれ、「結社」と呼ばれる同好会の数は八〇〇団体を超える。五十〜六十代の主婦層が多く、次いで停年退職後の男性。

俳句は日本の中世から近世にかけて隆盛した雅（みやび）な連歌の発句の形式を継承したものといわれ、五七五、わずか十七音節の短詩のなかに、自然情景の光と色彩の描写にとどまらず、万物の生命への愛や哀れ、作者の奥底にある心象や無限の宇宙をも凝縮して表現しようとするものである。

われわれ日本人は学齢に達した直後から、この日本独特の音律をもつ短詩に親しんできた。十七音節の短詩のなかに深く封じこめられた作者万感の世界を、鑑賞する者それぞれが独自の鍵をもって解放し、その目と耳で味わってきた。

HAIKUは日本を代表する定型詩として世界にも広まり、外国人による愛好団体は世界中に広がっている。

日本の多くの名句は外国人の日本文学研究者によっても翻訳されて、世界に紹介されている。

作家、川端康成、三島由紀夫の研究者としても著名なロナルド・キーン コロンビア大学教授は、日本俳句の古典的名作のひとつを次のように英訳して海外に紹介している。

しずけさや 岩にしみいる 蝉の声 芭蕉

Such stillness

The cries of the cicadas (蝉)

Sink into the rocks.

「月日は百代（はくたい）の過客（かかく）に於て、行き交ふ年もまた旅人なり……」

「……」という書き出しに始まる『奥の細道』のなかにある、あまりにも有名な一句である。

江戸時代前期、松尾芭蕉が江戸・深川の庵を築ち、苛酷な旅ののち辿りついた現・山形県天童市近くの急峻な崖に立つ、立石寺（りゅうしゃくじ）で詠んだ一句。

D・キーン教授の英訳文をそのまま現代日本語に置き換えれば、このような直訳文になるのだろうか。

こんなにも深い静寂のなか

蝉たちの鳴き声が入り込んでいく（沈んでいく）

散在する岩のなかに

俳壇の著名人や研究者、新聞社、出版関係者約二百人が集って行われた東京會館での授賞式と、それに続く華やかな祝賀のパーティー、二次会は深更まで続き、数日後、佳川清資氏は賞牌を抱いて郷里、山口県下関市へ凱旋した。

\*

「……新規の顧客をいつもこころよく紹介して頂いたり、業界のことを色々とお親切に教えて下さるお取引先の営業担当者の方がいらっしゃるんです。機会があれば一度お礼を申し上げてもらえませんか……」

私の会社の青年営業マン、松田祐介君の会議のなかでの言葉がきっかけだった。

松田君は二十二歳。大学をわずか三ヶ月で中退し、十九歳で私の会社に入社するまではロックバンド生活に明け暮れ、日常は喧嘩沙汰の絶えない威勢のいい青年だった。工場で一年余りの現場作業のち、やがてまだ少年のようなあとけなさが残る彼は、窮屈そうにネクタイを締めて営業マンとして顧客を回り始める。

職場の先輩達に社会人として、企業人としての心がけや智慧を毎日のように噛んで含めるように言い聞かされて外交に携わるうちに、彼は卵から雞に、やがて幼鳥へと育っていった。それまでのなげやりな性情もいつしか消えていった。

社会人として未熟な彼をなんの打算もなく、親身になって応援してくださる方が同じ業界におられる。このことは社員の彼のみならず、彼を指導すべき立場にある私としてもまことに有り難いことだった。

出張で広島に一泊される予定の佳川清資氏を迎えて、一夜の食事をこ一緒にすることになった。

秋色濃く、三人で囲むお好み焼きの鉄板の熱気が心地良い頃のことだった。

仕事の話はそこそこに、三人の話題はそれぞれの余暇の過ごし方や、これまでの経歴に発展していく。

「広島の特産（かき）も素晴らしいですが、地中海の特産もそりゃあおいしいんです……」



黙で、うつむいて歩いてるように見えた。

賢沢は出来なくとも個としてもつ主体性、みずから納得できる人生や日常の生活、そして利益を求めず創り出す喜び……………。

東京ではすでに郷愁となりつつあるような価値感が、少なくとも故郷の山口県には残っていたように思う。

こんな思いを抱いたまま、これからよく生き永らえてたかだか一万余日かの一生を終えるのだろうか。レオナルド・ダ・ビンチがたった一人で、その生涯に残した驚異的な偉業を思うたびに、佳川さんはいま二十代にして自分の一生が空しく固定化されてしまうことに暗然とする思いだった。

ひよっとすると、若き日のダ・ビンチも自分と似た思いを体験したかもしれない。美術や文芸をもっと掘り下げて、マグマのように突き上げてくるこの思いを何かに表現したい。一人よがりでも自己満足でもいい、この意志を形あるもの何かに残したい。通勤の地下鉄に揺られながら佳川さんは考えた。

七年近い東京でのサラリーマン生活の間にも変わらず育んだ夢。そしてイタリア渡航と長期滞在に備えて蓄えた貯金……………。

\*

一九八七年（昭和六二年）晩秋。二八歳の佳川清資はわずかな手荷物を手に、イタリア半島の北中部に位置するルネッサンスの都・フィレンツェへ単身、移住する。

ダ・ビンチの業績に直接ふれるとともに、イタリアじゅうを旅するなかで美や真実を追い、独自の表現技術を体得するための旅立ちだった。五年で終わるか、それとも十年を超える滞在になるのか。

つらい日が続くかもしれないが、たとえ飢え死にしてもイタリアの空気のなかで、アートに包まれるなかでなら本望と思った。

フィレンツェに到着。幼い頃から憧れ続けたレオナルド・ダ・ビンチやミケランジェロをばぐくんだ小さな都市が彼の眼前にあった。

その街は「天井のない美術館」と異称されるように、高台に登れば茶褐色のレンガ造りの建物が、まるで空から見ると配色を綿密に計算したモザイクのように立ち並んでいた。街のあちらこちらに散在する重厚なゴシック造りの教会、至高の美術品をたたえる美術館、そして街の中央を貫流するフィレンツェの母なる川、アルノ川。空を屋根として歴史を刻み、地球最高の文芸と美の集積地のなかで、佳川は新しい生活をスタートさせた。

當時を回想した佳川氏からの書簡から。

「……………私がフィレンツェで暮らすにあたってまず第一に始めた」とは、これから長期にわたって滞在することになる街の散歩でした。特に、第一日目の早朝から始めたアルノ川周辺の徒歩の散歩。鳥たちは冬支度を忘れたようにアルノ川の砂州のなかを自由に飛び跳ねていました。見るものすべてに心躍る思いでした。アルノ川ぞいのマロニエの大きな葉が黄葉して散る様子を見て、とうとう夢見てきたイタリアに来た、という感慨を深くしたものです。日本での、しがらみに満ちた生活から離れて、ひとり異邦にいて、という淋しさに似た開放感を、アルノ川にかかるベッキオ橋に立ったときにしみじみと味わいました……………」

お送り頂いた御著「おじさんの青春日記 その二」の『合衆国陸軍軍曹マスタカズオ』を読みながら、私は十五年も経た今になって、すっかり忘れていたあの散歩の日々のことを思い出していたのです。一九八七年十一月の下旬、まだイタリア語も出来ず誰ひとり知る人のいない異邦での、心細く、しかし希望に満ちた散歩。

その風景のなかに、貴著によって知ったマスタカズオという人の苛烈な生涯を重ねるようにして、私は熱い思いに胸を灼かれるようでした。同じ日本人が、異なった時代に、まったく違った境遇でおなじ景色を共有すること。それは歴史というパースペクティヴ（注・遠近法・透視画法）のなかでは日常的に繰り返していることなのでしようが、人の人生の短かさを思うとき、なにかめくるめくような感慨を覚えずにはおられません……………」

フィレンツェの街中に家賃二万円、六畳ほどのペンシオーネ（ペンション）を借りた佳川はフィレンツェの象徴ともいえるA花の大聖堂（サンタ・マリア・デル・フィオーレ）のすぐそば、ロレンツォ・デ・メディチ語学学校へ通い始めた。十五世紀を頂点として、フィレンツェに大きな富と学芸の興隆をもたらしたメディチ家の名前を冠した語学学校である。

生徒数は一クラス、七、八人と少人数。順調にいけば半年ほどで卒業できる。

絵に倦みしとき香水の匂いけり

我もまた異人となりし涼しさよ

翌年夏、半年あまりのフィレンツェでの語学研修を終えた佳川は、フィレンツェから北東百キロほどの都市、ピザンチン文化が色濃く残る古都、ラヴェンナの郊外にある避暑地、リド・アドリアーノのCIESIM（チシム）モザイク美術学院に入学する。

リド・アドリアーノの町は眼前のアドリア海をへだてて、はるか対岸にクロアチア

をのぞむ海辺の保養地。北イタリアの人たちが夏を過ごすだけの人工の町で、夏だけ開くスーパーマーケットや娯楽施設、別荘のほかは人家もない。シーズンオフには人口がゼロになる真夏の陽炎（かげろう）のような街である。

「アドリア海の女王」と歌われた水上都市、ベネツィアまでは北にわずか百キロほどの距離。陸伝いに西へ二百キロほどで地中海にいたり、東方の浜辺にはアドリア海の穏やかな波が打ち寄せていた。長靴の形をした、東西の陸地幅せいぜい二百キロほどのイタリア半島は、海に面した長い海岸線が常に海流で洗われる海洋国家であり、古代からはるか遠国の文物が船によってもたらされた。

鱸（すずき）、黒鯛、まぐろ、たこ、いか、ロブスター、かに……。水深も浅く、有数の漁場でもあるアドリア海の水産物は種類も豊富で、市場に行くとそれらの料理にふさわしい特産の白ワインが所狭しと並べられていた。佳川は店に山積みされた魚貝に故郷、山口県下関の魚市場の活気を思い出していた。

CISIEMモザイク学院は街中の中心地にあり、夏の二ヶ月間だけ開講された。イタリアだけでなくドイツ、スイス、フランス、アメリカ、オーストリアなどからの生徒約四十人が集まってきており、講義抜き、モザイク制作のみの授業が翌日から始まった。

一人一人にモザイク台があてがわれ、各自が思い思いのデザインで大理石や岩やガラスを砕き、モザイクを作り上げていく。二人の女性教師は制作に熱中する生徒たちの周りを巡りながら指導する。土曜日、日曜日を除く毎日、朝九時から夕方までモザイク制作の授業が続く。

モザイクを学ぶ学生のなかにスイスから友人を伴って入学した女性、カロールがいた。フランス語読みでカロール・シャヴァーリ。スイス・モントルー生まれ、十九歳の大学生である。避暑地リド・アドリアーノにふさわしい小麦色の肌に、肩までかかる東洋人のような黒漆（うるし）の長い髪を蓄えていた。五ヶ国語を流暢に話すカロールはイタリア語も完璧だった。

開放的な保養地で、教室の仲間同士が親しくなるのに時間はかからなかった。「キヨツ！」

フランス語の響きでカロールは佳川をこう呼んだ。

彼女は佳川が話して聞かせる日本の文化や風物にまつわる逸話を眼を輝かせて聞き入った。

佳川にとって教室のなかでは人種の違った同級生であり、妹のようでもあるカロールの存在がいつしか彼の関心事の大半を占めるようになった。

カロールは日本固有の文化にも豊富な知識を持ち合わせていて、驚いたことに、「シアツ（指圧）」や人体の「ツボ（壺）」などの東洋医学に関心を抱いていた。

「ねえ、キヨツ、モゲサってどんなもの？ 何から作るの？」

「蓬（よもぎ）の葉を乾燥させて綿のように精製したものなんだ。これを体のツボに少し乗せてね、それに線香で火を点けるんだ」

「えっ、熱くないの？」

カロルはこぼれ落ちそうな大きな茶色の目を見開いて、キヨの顔をのぞきこむ。イタリア語で日本の灸(きゅう)や針の治療を説明するのは骨の折れる作業だった。

「うん、その急所というか壺(う)とか、モグサをおく場所が正確だったらちっとも熱くないし、気持ちがいいんだ。疲れがとれるし、病気だって治ることもあるんだよ」  
「それで、それで？ それから？」

と佳川の話に質問を浴びせる。

カロルは好奇心や向学心の旺盛な女性であったが、控えめな性格で、立ち入ったこととは決して詮索しない。

「もし、よければ……」

「あなたがそう望むのなら……」

という言葉が会話でも手紙のなかでもかならず添えられた。

やがて二人は仲間たちとのパーティーからも抜け出して、二人きりでアドリア海の波音が聞こえる海岸を散歩する仲になる。

目の前には日によって色を変えるアドリア海が広がり、波濤の向こう岸は東欧諸国、黒海。そしてさらに緯度線にそってユーラシア大陸を東方へ進んだはるか果てに日本がある。

「この海を渡ってまっすぐに歩いたら、キヨの生まれたシモノセキの海に出るのね。そこまでいったい何日かかるのかしら……」

浜辺に立ちつくすカロルは遠くをみながらつぶやいた。

カロルの服装はいつも黒いTシャツかブラウスに、黒のスカートか七分のパンツ。アジア人のように見える体型に黒い髪はとうてい欧州人とは思えなかった。カロルと過ごすひときは同胞人といえるような安らぎを覚えると同時に、憧れ続けたヨーロッパの美の総体を自分ひとりで独占している思いを味わった。

二人きりになるとカロルは故郷、スイス・モントルーのことや両親のことをよく佳川に話して聞かせた。そしてカロルはしきりに日本のことや佳川の故郷のこと、彼の生い立ちを聞きたがった。

「……今から百年以上も前にね、日本には革命が起こったんだ。明治維新といってね。僕の生まれたチヨールシューはその革命を起こした革命家たちの多くを生んだ国なんだ。あの革命がもし起こらなかったら、日本はひよっとしたら今も海外渡航さえ許されない鎖国のままだったかもしれないね」

佳川の脳裡に故郷、山口県の萩や山口市内の情景がよみがえっていた。

「ルネッサンスの時代よりもはるか前からヨーロッパじゅうから人や文化が集まってきて、絢爛たる栄華を築いたイタリアじゃ考えられないことだったかもしれないね」

教室でモザイク台越しに二人の視線が合うとカロルは片目を軽く閉じ、はにかむようにまたモザイク台にむかった。

モザイク修業のはずのリド・アドリアーノへの旅は、佳川にとってはカロルに遭遇

するための旅だったように思えた。イタリアでの前途にカロルの姿が立ちはだかった。カロルの表情や、姿や、声や、しぐさは、佳川にとってそれぞれが色彩や質感の異なった寶石であり、彼はそれをモザイク台に狂おしく押しはめるようにカロルに傾斜していった。

リド・アドリアーノでの夏の生活は二ヶ月。またたく間に減っていく滞在日数を指折り数え、ため息をつきながらの二人の逢瀬が続いた。

相手のことを詮索することを好まないはずのカロルが、佳川と同じ教室のフランス女性との仲を嫉妬することがあった。

「……このままこのリド・アドリアーノの街で一緒に住むことができたらどんなに素晴らしいことかしら。秋になると誰もいなくなってしまうって、ここに住むのは私たちだけ。二人で小さなペンションを借りるのよ」

毎日の語らいのなかでカロルは時折り、佳川と一緒に暮らすことを口にし始めた。

「でももうすぐ学校も商店も病院も、なにもかもなくなってしまう町になるんだよ。いま僕達は、陽炎（かげろう）のような町にいるんだ。僕にとっては、君のことですら陽炎や幻のように思えるときがある……ああ、いつまでも消えないでほしい、ってね」

夏の初め、佳川はゴーストタウンのようなリド・アドリアーノの町へ初めて足を踏み入れた時のことを思い出した。

「……あなたはモザイク教室のアメリカ人のように、遊び半分でここに来てる人じゃない。あなたは私たちにとっては遠い遠い東の果ての国から、平穩を約束された生活を投げ出して、強い思いを抱いてイタリアへやってきたのよ。私たち、異国人同士だけど、あなたが日本で抱き続けた思い、私にはわかるような気がするの。自分の思いに忠実に生きることって、とても大切なことだと思っわ……」

カロルはしっかりと佳川の目をみつめながら話した。

「……私もスイスの父や母と、この夏の一度だけ、という約束でここへ来たの。

山や湖に囲まれた狭い社会で育って、私はいつか大きな海のあるそばで暮らすことが夢だったのよ。でも女だし、しかも学生の私には一人きりで生きていく力なんてないでしょ。でもここであなたと出会って、あなたがずっと私のそばにいてくれたら、これからどんなことをしても生きていけると思い始めたの」

カロルの言葉は佳川にとって異人種同士の同棲や結婚を意味すると同時に、それは自分が幼い頃から長年温めてきたイタリアでの留学生生活を根底から覆（くつ）がえすことだった。フィレンツェで暮らす日々では想像すらしなかったことだった。

五年、いやせめて三年、イタリアに滞在して、自分の描くプログラムでイタリアのアートにふれていたい。ひとりで。

ひと夏の学校生活が終わる間際、カロルは思いつめたように佳川に語りかけた。

モザイク教室がすんだら自分と一緒にスイスに来てほしい、そして両親に会ってほしい、と。

佳川はカロルとの会話のなかで次第に返事が曖昧になり、沈黙することが多くなった。思いもかけないカロルの出現が自分を大きく変えようとしている……。

十九歳のカロルの直情に、佳川はただ無言でその華奢な肩を抱きしめるだけだった。カロルの黒髪が頬にふれたとき、佳川はカロルと手をつないで下関市内の武家屋敷跡を散策する幻想を見ていた。

カロルと佳川は次の夏ふたたびリド・アドリアーノの町で再会することを約束して、秋風が漂い始めた保養地を離れた。カロルはスイス・モントルーへ、佳川はフィレンツェへ。

その後、二人の間で文通が続いた。カロルと交わした手紙の数はおびただしい数で、二人の交わす手紙のなかにはそれぞれが描いた相手の肖像や、リド・アドリアーノの情景描写が添えられることがあった。

愛しいキヨへ。

あなたからの手紙、うれしく受け取りました。サビーナも写真が届いたって喜んでいたらわ。でも、なぜサビーナだけに送ったりしたの？わたしにも送って下さるわね。

ラベエンナやリド・アドリアーノでは楽しかったわね。スイスのわたしの町に帰ってからも、ずっとキヨのこと、夏の学校のことを思い返しています。あの夏の日々と、この静かな田舎町での生活はあまりにもギャップがありすぎて、いまだにボーンツとしている感じ。リド・アドリアーノの学校が終わって、キヨがわたしの町へ来てくれていたらって、今でも思っています。

キヨはまだしばらくフィレンツェのペンションに居るの？いつまで？こちらへ遊びにくるのは無理？

ひとつ提案があるんだけど、これからイタリア語で互いに手紙のやりとりをしましょう。できるだけ頻繁に、ながくながく書くの。そうすれば私もあなたのことや、あなたの家族や、あなたの国や町の様子がもっとずっとよくわかるし、キヨもイタリア語がもっと上手になれるでしょ。私も頑張ってたくさん書くから。

また会える日を楽しみにしています。

モントルーより、たくさんのキッスを送ります。

すぐに返事を書いてね。きつとよ。

一九八八年\*月\*日

カロル

フィレンツェで描く佳川の肖像画はいつもカロルの像だった。タイルや岩を集めて描くモザイク画にもカロルの横顔があった。  
佳川は当時の日記にこう書き残している。

一九八八年\*月\*日

カロルのことをよく考える。できるならば最後の人になってほしい。カロルがその気なら、ぼくはどんなしながらも問題にならない。君も、家族も、それから君の家族だって幸せにしてみせる。宗教の問題？ 君が望むなら自由に選択すればいい。ぼくの方は変えることは出来ないけど。おなじ墓に眠りたい。ぼくは君の国の言葉を憶えるし、君もぼくの国の言葉を憶えてほしい。きみとだったら一緒にやっていける………

一九八八年\*月\*日

カロルのことばかり考えている。イヤになるほど考える。日本に帰る前に彼女の国へ行くという幻のような衝動を感じる。街はきみのイメージでいっぱい、きみと似た顔ばかり行き来している………

大切なキヨへ。

フィレンツェでの近況、うれしく受け取りました。キヨがいまイタリアで大いに楽しんでることを知ってうれしく思います。でも彼女(ガールフレンド)は作らないでね。

わたしの方は元気でやっています。でもこのところ天気は悪いやら、寒いやらで憂鬱です。何週間かすればスキーに行けるようになるけど。学校は始まつたけど科目は退屈で、あまり興味がもてません。イタリアでモザイクをしていた頃がなつかしい。キヨは日本へ帰ったらモザイクを続けるつもり？ こんど日本へ帰ったらキヨはなにをするつもりなの？

たくさんの「モグサ」を送ってくださいあってありがとう。あなたからのモグサが私の町でどれほど幸福をふりまいてるか知ったら………スイスでは手に入らない、とても貴重なものなんですもの。

いま日本のことを書いたものをたくさん読んでいます。歴史や、文化や、自然とかも。でも日本に関する本を捜すのはこちらではひと苦労なのよ。先日、ジュネーヴへ出かける機会があったときに捜してみたんだけど適当なものがないの。

あなたの国で英語で書かれたものがあれば送ってくださいね。

モグサのお礼にサバイバルナイフとスイスのチョコレートを送りました。  
ナイフがスイスの名産だったこと知ってた？

もうひと月もしたらクリスマスです。この時期は毎年町じゅうが飾りに満ちて、人々は幸せで、多くの人が街路にあふれて光に満ちあふれています。日本にもクリスマスはあるの？

できればもっともつと書いてね。会うことが出来ない以上、手紙で沢山お話しすることがお互いの気持ちを確認し合える唯一の方法なのだから。

フィレンツェもこれから寒くなります。くれぐれもあなたの健康を祈っています。

あなたはひとりぼっちなんだもの。いまからでも飛んでいきたい……………。  
一日でも早く返事をくださいな。

一九八八年\*月\*日      モントルーにて

あなたのカロル

次の年の夏、日本へ一時帰国していた佳川は約束の日までにリド・アドリアーノに赴くことができなかった。果たせなかった二人の再会。日本にいてもカロルのことを想わない日はなかったが、久しぶりの日本での日々が佳川の迷いを複雑なものにさせていた。

カロルへの思いは変わらず募るばかりだったが、イタリアでの生活にその糧(かて)すらおぼつかない佳川にとって、彼女との再会は自分が抱く大切なものを犠牲にした決断が前提となる。リド・アドリアーノにいた頃のように、気軽に明日の散歩の約束をすることとはわけが違う。これからの生涯を異邦人であるカロルとともに過ごすことに不安とためらいが深まっていった。

カロルからの手紙は続いた。いつか必ず一緒に暮らせる日が来ることを待っている、会いたい、というものだった。そして次の夏こそ、リド・アドリアーノの町でキヨを待っている、と。

次の年の夏、例年と変わらぬ活気を取り戻したリド・アドリアーノのホテルで、アルプスの国からやってくる恋人を待ちわびる佳川の姿があった。

しかし、カロルが両手を開いて佳川の前に立つことはなかった。

人気もないアドリア海の岸辺に出かけた佳川は二年前カロルと二人で腰掛けた木作りのベンチに座って、茫然と遠浅の海を眺めた。

イタリアで暮らす日々、佳川は時折り昔読んだ森鷗外の小説を思い出すことがあった。佳川が生まれ育った下関市から直線わずか百キロ、山口県境に接する島根県津和野町出身の作家、森林太郎鷗外の代表作ともいわれ、明治の香り芬々(ふんぶん)

たる文語体によつて書かれた短編小説「舞姫」である。  
軍医としてドイツに留学した経験をもつ森鷗外自身がモデルともいわれている。

物語は五年間のドイツ留学を終えた太田豊太郎が日本への帰途、船が停泊したサイゴンの港で、ドイツでの日々を悔恨の思いで回想するところから始まる。

明治初期、明治維新を境にヨーロッパの強国を師として近代国家建設の意欲に燃える日本政府の命によつて、エリート官僚太田豊太郎は法学を学ぶためにドイツへ留学する。やがて太田豊太郎は下町に住む貧しい踊り子、エリスと知り合い、恋におちる。

エリスとの恋はたちまち留學生仲間や本国に知れるところとなり、仲間の告げ口によつて太田は免職の処分を受ける。幼時から学問では常に首席を通し、国を担うエリート官僚として将来を囑望された太田豊太郎にとつて貧しいドイツ人、エリスとの恋は日本での栄達や出世を投げ出すだけでなく、広漠としたドイツをエリスとともに当てどなくさ迷うことを意味する。

東京からは手塩にかけて今日まで育ててくれ、彼の出世を心待ちにしていた母の死去を告げる手紙が届いていた。

免官された太田豊太郎は友人、相沢謙吉の友情によつて在ドイツ通信社の通信員の職を得るが、本来の渡独の目的たる勉学の意欲も失い、エリスとの貧しく不安定な同棲生活を送っていた。相沢の助言や苦言を聞くたびに、太田豊太郎はいまの境遇に悩み苦しむようになる。やがて妊娠したエリス。北ヨーロッパの寒い冬。

ある時、ドイツを訪問した日本の大臣に相沢の紹介で知遇を得る。大臣からその非凡な語学の能力を買われた太田豊太郎は官僚への復職を暗示され、大臣と共に日本へ帰国することを勧められる。大臣の言葉に心動く太田豊太郎。

ついに単身、日本へ帰国することを大臣に請う太田豊太郎。

「……もしこの手にしも縋（すが）らずば、本国をも失ひ、名譽を挽（ひ）きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大陸の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝（つ）いて起れり。嗚呼（ああ）、何等の特操なき心ぞ、」（注・大臣に）『承（うけたま）はり侍（はべ）り』と応へたるは。」

「舞姫」本文より

貧しく身重のエリスをドイツにおいたまま日本へ帰る、という太田豊太郎の決心。このことを不用意な相沢の言葉から知ったエリスは激しく取り乱し、嘆き悲しむ。相沢と語らつて、一家が生計をたてるに足るいくばくかの金をエリスの母親に渡してドイツを去る太田豊太郎。ついにエリスは精神に錯乱をきたし、その胎内に子を抱いたままの生ける屍となつたのである。

「嗚呼（ああ）、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むところ今日までも残りけり。」

「舞姫」本文より

という結文でこの物語は終わる。

哀しく、そして後味の悪さが尾をひくような物語だった。

初めて鷗外の「舞姫」にふれたとき、佳川は小説とはいえその主人公、太田豊太郎のあまりの身勝手に嫌悪の情を抱いたものだった。エリスの犠牲に心からの同情を感じるともに、エリスを蹂躪（じゅうりん）したまま、自身の栄達と立身のために母子を放置したまま帰国する主人公の不誠実。なすすべもなく、母親の温もりに救いを求める幼児のようにドイツから故国へ逃げ戻った太田。佳川は日本人として軽蔑の念を抱いたものだった。

しかし今、「舞姫」の主人公、太田豊太郎をさげすむ資格が自分にあるだろうか。カロルの熱い情愛を受けながら、太田豊太郎と同じ優柔不断、かつてカロルがいみじくも口にした「日本男子の表現の曖昧さ」で、何の行動も起こすことなくカロルと自分を欺きながら過ごしたこの二年の歲月。「芸術・文芸の探求」を自ら都合のいい大義にして、人として自立さえ出来ていない自分のふがいなさ。

しょせん自分も太田豊太郎と同じように、異国人との陽炎のような情事を味わっただけなのか。

「舞姫」のエリス、そしてカロルのけなげな献身と捨身。佳川は二人の女性の、その情愛がなせる強靱さをつよく感じた。

佳川はいますぐにカロルと向き合って、思いのすべてをカロルに告げたいと思った。そして、どのような犠牲を払ってでもカロルにエリスと同じ哀しみを味わせることはすまいと思った。

ベンチにたたずむ佳川をいつの間にかアドリア海のたそがれが包んでいた。

\*

その日、佳川がスイス・モントルーの瀟洒な駅舎に降り立ったのは昼さがりのこと。フィレンツェからミラノまでは電車で、そしてミラノからは国際列車に乗り換える旅およそ十時間。列車の窓に次々と現れる雪を戴いた山脈や森はほとんど記憶にない。思いの揺れる孤独な旅であった。きょうの訪問はカロルには告げていない。

フランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタイン、五ヶ国の国境に接したスイスは古代から人や物資が行き交い、東西南北からのさまざまな文化が混在する。いつかターナーの絵で見たレマン湖のほとりに立つ古城の城壁には、この地

で展開された争いと栄華、繰り返される民衆の生と死の陰影がまだら模様になって染みついていた。

カロルは生まれて以来、冬には長く雪で覆われるこの地を離れることなく二十年を過ごしてきた。山々の雪解け水であの長い黒髪を洗ったのだ。そして彼女は初めての外国暮らしで、風変わりな東洋人と出会ったのだ。

カロルを育てたこの土地、湖と空、カロルが毎日呼吸し続けたこの清冽な空気。佳川はそのすべてがいと美しく思われ、カロルを取り巻いた自然に感謝したい思いだった。

モントルーは三日月の形をしたレマン湖に面した町である。

カロルの住む町、シェルネーはモントルーの町からしばらく単線の電車で登った山の中腹にある田舎町。電駅のそばにとったお城のようなホテルからはレマン湖が真下に見渡せた。

荷物を置いた佳川は、メモを片手にカロルの家を尋ね歩いた。しばらくして町のはずれに目的の場所を捜しあてた。

玄関に出てきたのはカロルの母親らしい中年の女性だった。

佳川が挨拶をする前に彼女が口を開いた。

「キヨ、ね？ 娘からいつも聞いています。遠いところをよく訪ねてきてくださいました」。

イタリア生まれという母親は、如才なく佳川を家内に迎え入れた。

「いつかあなたが訪ねてくると思っていました。その日が来ることを待っていたよつな、でもこわいよつな……」。

佳川はイタリア語で話す母親の言葉の本当の意味が理解できなかった。

歓迎されているのか、それとも彼女の笑顔の裏にやんわりとした拒絶があるのか。

「きょうはカロルはどうしていますか？ あらかじめ知らせずにお訪ねしたものですから」。

「残念だわ。今夜は仕事で帰りが遅くなると言っていました。まあ、お掛けになって。お茶でも……」。

そう言って母親は佳川に椅子を勧めた。

長いお茶の支度。佳川は母親の素振りに、長い逗留はお勧めしませんよ、という拒絶を感じた。応接室の照明は暗く、古城のなかにさ迷い込んだようなひんやりとした空気が漂っていた。部屋の調度品は吟味されたもので、マホガニーのテーブルや黒光りする皮張りの長椅子は、おしなべて生活水準の高いスイスの中流家庭を象徴しているようだった。

初対面の西洋人と東洋人が向かい合うその部屋は笑い声もなく、時間が経ってもいっこうに空気が温かくなることはなかった。

「あなたもご存知のように、カロルは二人姉妹の長女で、私たちにとっては跡取りというわけなの。そういうつもりできょうまで育ててきたのです……日本という国も、スイスに追いつくくらい優秀な時計を造る国、くらしいのことが知らないの」。

母親は一人で話し続ける。

「……オペラの『蝶々夫人』で見たことがあるけど、男の人もあんなに裾(すそ)の長いキモノを着て、自動車を運転しているの？ 腕時計はキモノには似合わないと思うのだけど」

彼女は大げさな身振りで蝶々夫人のしぐさを真似てみせた。佳川は長々と続くフランス語とイタリア語の混じったチグハグな会話に耐えられなくなっていた。

寡黙で頑迷な父親と母親との間に口喧嘩が絶えないことはカロルから聞いていた。フランス系スイス人である父親は厳格で、毎日五分とたがわず出勤し、勤務を終えた夕方には定刻に玄関の扉を開くという。スイス人であることを誇りに思い、気位の高い父親はカロルがユーラシア大陸の東の果て、さらにその先にある島国に関心を寄せていることを苦々しく思い、東洋人種と交際することに不満を持っていることはカロルの話から想像できた。カロルをこの誇り高いスイスの土地に押し込めようとしていることも、カロルからの手紙で知っていた。そして、そのことをカロルが何より苦痛に思っていることも。

カロルの母親の饒舌に、名もない留学生の身である佳川は自分が城門の前でたじろぐ蟻のように思えた。イタリア文明やレオナルド・ダ・ビンチへのあこがれが無情に突き崩される思いだった。

「……きょうのところはホテルに帰ります。カロルが帰ってきたら、電話をくれるようにお伝え頂けませんか」

佳川は玄関先まで見送りに出た母親に告げた。

その夜、佳川は未明までカロルからの電話を待った。まどろんでいた佳川がカロルからの電話で起こされたのは早朝のことだった。

「キヨッ、だめなの。きょうはどうしても会えない。きのう夜更けまで父や母と話したの。キヨに会ってはいけないうって。とにかくきょうはフィレンツェへ帰って、お願いだから。今もあなたのこと好きよ。死ぬほど」

悲痛なカロルの声が電話口に響いた。

「リド・アドリアーノで初めて会った夏に、あのまま私はあの町であなたと一緒に居たかった。ずっと。スイスへ帰らない覚悟は出来ていたのよ。」

去年の夏も、父母の目を盗んでイタリアへいつでも出ていける支度をしたの。あなたはいつか『カケオチ』っていう日本語を私に教えてくれたわ。私はあなたと『カケオチ』をするつもりでいたの。モントルーへはもう二度と再び帰らない覚悟でね。

キヨ、きつとすぐにまた手紙を書くわ。どうか、待っていて、お願い」

佳川はただ短く返事を戻すだけだった。

電話をおいて窓から見おろすレマン湖には一面に朝もやが漂っていた。

\*



レオナルド・ダ・ビンチ[少女の横顔の習作]  
トリノ王室図書館蔵

ルネサンス映し遅日<sup>ちじつ</sup>のアルノ川

見えていて着かぬ遠さの暑かりし

佳川清資が俳句の扉を開いたのは、四年間のフィレンツェ生活を引き払って日本へ帰国してからのことだった。

帰国してからの佳川は何年ものあいだ鬱と無感動の日々が続いた。東京の町をのっぺりとした顔で、無表情に歩く人の波を見ると腹立たしく思うことがあった。いくつか仕事を変え、東京、山口と居を変えても、ぼっかりとあいた心の空隙を埋めるものはなにひとつなかった。

カロールからの連絡はあのレマン湖のほとりのホテル『イリス』へかかってきた電話が最後だった。何通かのあと、いつしか彼女にあてて手紙を送ることもあきらめた。

レオナルド・ダ・ビンチは遠く、はるかな存在だった。

「読者よ、もしも私に関心をもつなら私のノートを読みたまえ、私のような人間は極めて稀にしか生まれてこなかったのだから。というのも、こういう新しいものを新たに自分で創ろうと望む少数の者のみが、このような研究を持続する忍耐力を保持し続けることができるからだ。」

おお人々よ、このような研究によって、自然の内奥に発見されるさまざまな奇蹟を

見にきたまえ。」

この、ダ・ビンチの尊大とも言える自信に満ちた言葉はどうだ。

ダ・ビンチが生きた土地の空気や歴史の一片にでも触れたいという思いで渡ったイタリアだったが、古代から中世、そして今に厳然と生きつづけているヨーロッパの壮大な文化と歴史は、容易に自分を受け容れてはくれなかった。地中海の北、陸続きのヨーロッパの国々には彼らが奪い合い、宗教がもとで殺し合い、混血し、商いをし、そして華麗な美を生み続けた壮大な営みがあった。なかでも有数の先進諸国が接するスイスはそれら諸国の十字路であった。カロルはそこで生まれた。

自分の臆病さに後悔と自責が今も残る。なぜあの時、ためらいを捨ててカロルを奪えなかったのか。あれほど彼女も待ち望んでいたのに……。

自分が本当に日本に持ち帰るべきは、カロル、彼女そのものだったのだ。

帰国してからの佳川にとって日本での生活は「余生」にすぎない、とさえ思えた。

長い歳月と、そして故郷、山口県の風土が佳川清資の傷心を水流に晒(さら)される布のように癒してくれた。年を経て、生活の匂いを感じられるようになった頃、佳川は俳句十七音節のなかにまだ残る自責を封じるように文字を刻みはじめた。隣家の散髪屋のおばちゃんの幾度もの誘いがきつかけだった。自分の生まれた下関のごく普通の庶民生活のなかに、日々折々の情景や心象を見つめようとする日本人の精神が生きていた。

やがて句誌に投稿し、識者の評を得ながら、年間の作句は千句を超えた。

その源となったのはカロルへの想い、それに違いない。

冒頭に掲げた「朝日俳句新人賞」の対象となった句のひとつは、評者の説にあるとおり、佳川が内奥に抱く傷を歲月ののち凝視しようとするゆとりの芽生えなのかもしれない。

踊らない人を離れて踊りけり

俳人、佳川清資はまもなく四五歳を迎える。

彼は今も忙しく各地を飛び回りながら、俳句を詠みつつける。

風の音、花の群れ、黒い髪の女性、空駆ける雲、虫の歩み、友との別れ、出会い、水のしづき、田圃の煙、朝の潮の香り、押しつぶされた果実、いつかの旅、人の老い、たちのぼる湯気、揺れる稲穂。

それらはすべて彼にとっていとおいしい存在。そして花鳥風月、栄華無常を詠むとき、いつもかたわらに十五回の四季を経たいまも容貌の変わらぬ、カロルの幻影がある。

俳句は読む人の自由性を尊ぶものであると同時に、ある面きわめて挑戦的な文芸形

式ではないかという気がする。鑑賞する側に想像の力や知識、言葉への感覚、歴史感や生命感を問いかけ、呼び覚まそうとする。作者ご自身の自注を得てご紹介するのは、佳川清資氏の近作のいくつかである。そしておわりの二つの句は、あえて自注を求めることをしなかった。

\*

ひかけ  
戻れば泰山木の花厚く

泰山木は雨季に白い、大きな花をつけます。陽があたっているうちは、ただ乳色の花色が光をはぢいていますが、ひかげると花弁は光を失い、肉厚な弁ばかりが目立っていました。

父を滅ぼして卯の花腐し降る

卯の花腐し、とは梅雨の雨が卯の花を濡らしてダメにするという季語です。私の父は一日中、坐椅子に座っていて、庭の花に水をやるときだけ二、三度席をたちます。雨が続くと席を立つのはトイレのときだけになります。

フィレンツェの荷へ折畳蠅叩

フィレンツェに住んでいる日本人の友達が蠅たたきを送ってくれ、と手紙をよこしました。かの地には蠅たたきがなく、かといってフィレンツェは盆地で暑く、蠅が多い。スプレー式ものは危険なので。面白い属目だと思いました。

すっぱんを釣らむとすれば草いきれ

すっぱんは甲干しに石の上にあがってくるやつを、その尻を釣り針で引っ掛けて釣り上げます。石の上にあがってくるまで草の中に腹這いになって待っている男を詠んだのです。

萩たまげなす脈脈と維新の血

萩は維新発祥の地です。山口の伝統野菜である「たまげなす」の栽培、販売プロジェクトに挑む若い公務員たちの健闘を讃えて詠んだものです。

香水に祖母の十九世紀あり

一〇五歳の祖母は十九世紀生まれ。三世紀にまたがる人生を讀えた作です。祖母の香水には十九世紀の香りがある。

実際のことではないのですが。

死にも得でエリスを失ひし寒暮かんぼ

舞姫のなごりの湖うみや夏の果

了

参考文献：

- |                      |           |
|----------------------|-----------|
| 「対訳 おくのほそ道」          | 講談社       |
| 「阿部一族・舞姫」            | 新潮社       |
| 「俳句朝日 二〇〇三年五月号」      | 朝日新聞社     |
| 「山口新聞 二〇〇三年五月二十五日記事」 | 山口新聞社     |
| 「少女の横顔の習作」           | トリノ王室図書館蔵 |

おじさんの青春日記 その8

著者 里吉賢司

発行者 733-0034

広島市西区南観音町一七番二〇号

株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二)二三一・三二〇九(代表)

FAX (〇八二)二九一・三三四九

E-mail Ken1221@urban.ne.jp

頒価 一〇〇〇円(送料含む)

発行 二〇〇四年(平成一六年)一月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ ホームページアドレス

<http://www.urban.ne.jp/home/oji-san/>